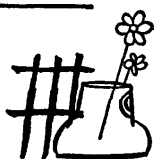


巻頭言



国際的な技術交流のために

石原孝一郎†



本学会も創立以来 22 年を数え、会員も 1 万 7 千名を超す大学に成長した。会員数だけでなく大会、研究会等の日常活動でも目覚ましい発展を遂げつつある。これもこの分野に対する社会のニーズ、期待の大きいことに加えて、諸先輩が築かれたしっかりとした基礎のおかげと言わねばなるまい。

さて 22 才と言えば、人間でも家庭や学校という、いわば「大事にしてもらう」環境を離れて、自らの道を拓いていく年令である。当学会も今まで以上に、情報処理技術の発展を通して新しい道を拓き、社会に貢献すべき時代になっているといえよう。その方法は数多くあるが、ここでは国際的な技術交流による貢献を考えてみたい。

世界的な経済不況の中で貿易摩擦が大きくクローズアップされている。対象となる製品も従来の自動車や家電品から、半導体など我々に身近な物まで問題となりつつある。ことの是非はさておき、国産技術が急速に発達してきた証拠と言える。しかし我々科学者、技術者としては、摩擦を起しやすい「製品の輸出」から、竿頭一步を進めて、誰にでも歓迎される「技術の輸出」へと貢献の質を高めていく必要があるのではないだろうか。これこそ、輸出なしでは考えられない日本の社会への、ひいては国際社会へ当学会が貢献できる大きな道と考える。

幸い、国際的な技術交流の場として一昨年の IFIP 80 や FTCS 10、昨年の IFAC、今年予定されている ICSE 等、関連する国際学会が日本で毎年開かれており、また米国で開かれる学会でも日本セッションが設けられるケースが増えている。しかしこれら学会の盛況も、時には、遠い東洋の国に対する物珍らしさに支えられていることもあろう。こうした域を脱却して、真に日本の技術を海外に問うためにも、また海外の技術者をしてぜひ日本の技術者を招待したい、あるいは日本で学会を開きたいと思わせるためにも、以下の点

を考えてみたい。

(1) 良い論文が集まること。論文誌にせよ大会にせよ、これが成功の最大の鍵であり独創性に富み、論理的に裏付けされた論文が望まれる。この点で研究のレベルアップをはかり、自己の成果を世に問い、また第三者の批判を受けるためにも、積極的な発表活動、特に今の場合、欧文誌への投稿や海外での発表をさらに活発に行なっていただくようお願いしたい。

(2) 良い討論ができること。同学の士からの有益な討論ほど研究の刺激になるものはない。当然のことながら学会は give and take の場であり、言い放し、聞き放しにならぬよう、自由で建設的な討論の場としていく必要がある。日常の研究会、大会の時からこうした雰囲気盛り上げる努力が必要であろう。

(3) 語学の問題。この点で我々は大きなハンディキャップを背負っている。しかし幸いオフィス・オートメーションの技術が発達してきており、早く良い英語論文作成援助システムが開発されることが望まれる。

また一般の会話力の無さをいわずに学校教育のせいにする事なく、我々情報処理技術者としてさらに良い語学教育補助システムの開発に力を入れても良いのではなかろうか。

(4) 国際学会主催体制の確立。過去に日本で開かれた国際学会の陰には、資金集めから会議場選びまで手弁当で大変苦勞された方々の努力がある。こうした面での設備や体制が整備され、安心して日本に学会を招ける体制が望まれる。他学会とも協力して基礎作りをしていく必要があろう。

来年の IFIP 83 の他、今後とも国際交流の場はさらに増加しよう。日本の情報処理技術をさらに発展させ、その成果を海外に問うためにも、会員各位の一層の努力と御理解をお願いしたい。

(昭和 57 年 3 月 8 日)

† 本会理事 日立製作所システム開発研究所